

親鸞伝承の始原試考

御手洗 隆明

浄土真宗の歴史は、五十年ごとに訪れる宗祖親鸞の御遠忌を節目とする。近代以降、一九一一年六百五十回忌では近世以来の伝承的親鸞像と史実的親鸞像が未分化であった頃の宗祖像が伝わり、五十年後の七百回忌までには伝承の多くは退けられ、史実と認められた史料による親鸞伝が主流となる。そして七百五十回忌を間近にした今、史実の追求と共に、伝承・伝説を見直そうという傾向が生じている。

近世初期、東西本願寺の学僧が著した「御伝鈔注釈書」(御伝照蒙記・御伝絵視聴記等)には、本願寺が相伝する史書等(最須敬重絵詞・反古裏等)に加え、当時民間に流布していた親鸞伝承が、批判的な扱いながらも記されている。ここで伝承史料とするのは近世以前成立という談義本(親鸞聖人御因縁・親鸞聖人由来等)、近世中期以降成立という絵解き台本(御絵伝教授鈔・御伝鈔演義等)、巡拝記(遺徳法輪集・二十四輩順拝図会等)、あるいは非本願寺系の史書(高田正統伝・親鸞聖人正明伝)などであるが、これらの史料が伝える親鸞像には、その時代の人々が期待し願った宗祖像がうかがえる。東西本願寺の史書が伝える親鸞像とは異質であるとされても、やがては取り込まれ、本願寺が伝える史実として相伝された例も見受けられる。

伝承は史実の無いところに生まれる。特に近世初期の伝承は、御伝鈔注釈書や本願寺系・非本願寺系の親鸞伝を通して世に広まることで新たな伝承を生み、そのいくつかは現代においても語り継がれている。それは真宗史が重層的な歴史を持ち続けていることの証しでもある。伝承が生み出され受け継がれていく様相をたずねることが一つの方法であろう。また一つ、近世初期の伝承については、その伝承の始原を探究することが史実への手掛かりとなる可能性もあるのではなからうか。

具体例を探ると、親鸞の伝承上の生母「吉光女」は、本願寺派知空が御伝鈔注釈書「照蒙記」で伝聞として記し、高田派普門、大谷派恵空もこの名を伝え、高田派良空の『正統伝』の影響で普及したとされているが、恵空が『視聴記』に記した「良観和讃」による伝承の始原は室町期までさかのぼる可能性が残されている。なお、美術史の分野であるが、関東荒木門徒系の万福寺所伝「親鸞伝絵」には親鸞生母らしき女性が見えている。この荒木門徒は親鸞の結婚因縁である「坊守縁起」を記した『御因縁』を伝えた門流としても知られている。

また親鸞消息と『御伝鈔』に登場する元山伏の門弟明法房であるが、山伏時代の名を弁円とする伝承は『照蒙記』・高田派普門「絵伝撮要」などの御伝鈔注釈書には見えず、「山伏弁円」が記されるのは恵空『叢林集』『視聴記』(または康楽寺系の『御伝絵説詞略鈔』)成立の頃と思われる。なお、『視聴記』は「有人云、常陸国上宮村に播磨坊弁円と云ふ山伏あり…秀の記に明法房法名は証信と云。佛光寺の本に爰に加添の文あり」と荒木門徒による伝承を示唆している。

第7部会

このように、近世初期の知空や恵空が伝え聞いた伝承には荒木門徒（後の佛光寺教団）の影が見受けられる。一説に初期真宗の主流は荒木門徒系であったというが、その多くが蓮如の本願寺に流入した後、荒木門徒が相伝してきた宗祖像はどうなったのか。本願寺に認められなかった親鸞伝が、伝承という形で残ったと考えることはできないだろうか。一つの可能性として、伝承という形で残った親鸞伝が、近世初期においては本願寺系学僧より「街談衢話」といった風説扱いをされながらも、やがては東西本願寺の正史というべき史書に記され、世に知られていったという展開を想定できるのではないか。